

テーマ活動づくりの方法論を求めて(その3)

福田三津夫

(白梅学園大学, 演劇教育)

論文の概要

ラボ・パーティのテーマ活動は地域における優れた演劇教育の典型であり、「限界芸術」(鶴見俊輔)の一つであるという視点に立って、生き生きとしたテーマ活動を展開している宇津木一実チューターのインタビューからその方法論を探ってみた。

キーワード

テーマ活動づくりの方法, 地域演劇教育, ことばと心の受け渡し, からだの語り, 等身大の表現

「テーマ活動づくりの方法論を求めて」のチューター・インタビューは佐藤公子さん, 渡辺忍さん, 前田祥子さんに続いて今回は4回目になる。

繰り返しになるが, そもそも私はテーマ活動について次のように考えている。

- ・テーマ活動づくりの方法論を持たないと, 生きいきとしたテーマ活動は展開できない。
- ・その方法論は画一的である必要はまったくない。おおよその到達目標を確認して, その迫り方や方法はチューターに委ねるのがラボには相応しい。例えば, 山頂は目指すが, 登山ルートは異なっても登頂できればいい, ということである。

2023年2月15日, 今回の宇津木チューターに対するインタビューは事務局の吉岡美詠子さんを交えて久しぶりに対面で行われた。吉岡さんには記録担当に加えて, 3人でのミニ研究会の構成メンバーという役割分担をお願いした。

●なぜ宇津木チューターへのインタビューか

端的に言って宇津木チューターへのインタビューを決めたのは吉岡さんからの推薦があったからである。その理由を改めて語っていただいた。

〔吉岡さんの推薦理由〕

これまで福田先生には比較的チューター歴の長いチューターにインタビュー(パーティ訪問)していただいた。次はぜひ若い世代のチューターの実践や考え, 思いを聞いていただきたいと思った。

宇津木チューターとは東京総局在任中に担当地区であったことから, パーティのようすについて話をうかがう機会も多くあった。また支部の教務委員会でもご一緒し, テーマ活動で大切にしたいことをご自身のなかで明確にもち, 悩み, 試行錯誤しながらも実践されようとしている姿勢をつねに感じていた。今回, ちょうど発表会を間近に控えているタイミングであったこともあり推薦した。

最近, 先輩パーティを引き継ぎ, 幼児から大学生までの縦長異年齢パーティになった。苦勞されていることも多々あると思うが, 先生とお話いただくことで, 双方に気づきがあると期待している。

吉岡さんからの推薦を受けて、宇津木パーティのテーマ活動を拝見する機会が程なくやって来た。それは「2022年 ラボ西武地区・冬のテーマ活動発表会」(2022年12月18日、東村山市中央公民館ホール)だった。その時の感想を文末に掲載したが、思わぬ再会もあり充実した時を過ごすことができた(参照「参考①2022年ラボ西武地区・冬のテーマ活動発表会の感想」)。

推薦を受けた宇津木パーティのテーマ活動は実に生きいきして躍動感に溢れていた。そしてなにより子どもたちの等身大の演技に好感がもてたのだった。テーマ決めから発表までのテーマ活動の過程について、微に入り細に入り丁寧に伺い、共にテーマ活動づくりの本質・方法に迫りたいと思った。

テーマ活動づくりの実際に触れる前に、その前提として「チューターになったきっかけ」や「現在のパーティ状況」について語っていただいたが、簡潔に紹介しておこう。

●チューターになったきっかけ

宇津木一実パーティは東京支部西武地区所属、2013年開設。

宇津木さんの母親がラボ・チューター(根岸順子)で、清瀬と秋津で30年パーティをしていた。宇津木さんの息子(ニョロ、高2)と娘(マカロン、中1)は根岸パーティに入会。根岸パーティでは大きな子にかわいがってもらい、活動を楽しんでいたが、2016年、母である根岸チューターに引継ぎを勧められ、根岸パーティを引き継いだ。

パーティ会場は安松会館(所沢市)ほか秋津、清瀬周辺で数か所。

●現在のパーティ状況

会員は3才から大学3年生まで15名。2022年4月からは長川真弓パーティを引き継いでいる。

・火曜日の所沢会場は、幼児グループ3名。清瀬会場は、小5から中2まで3名。

・金曜日の秋津会場は、小6から大3まで9名。

テーマ活動の発表は年に3回だが、幼児と清瀬グループについては2回、ナーサリー・ライムや英詩などを1回発表する。ちなみに、現在、金曜日の秋津グループでは『太陽へとぶ矢』を英語のみで発表しようと取りくんでいる。

毎年地区発表会は幼児も一緒に発表してきたが、今回幼児グループのメンバーはご家庭の事情等で『西遊記』は辞退した。

●テーマ決め(『西遊記』『金角銀角との戦い』)

まずは金曜日グループの子たちと話し合うが、引き継いだ子たちのことがまだ理解できていないし、持っているライブラリーも把握していないので手探り状態であった。

2022年4月から7月までは宮澤賢治の『注文の多い料理店』に取りくんだが、秋は、幼児も一緒に取りくめるものがないねと、わりとすんなり『西遊記』に決まったという。

福田:『西遊記』に決めた理由に「年代を問わず思いっきり楽しめそう」(「事前経過レポート」※1)とありますが、「楽しめそう」とはどんなことでしょうか。

宇津木:物語の世界を体感したり、役になりきって思いっきり台詞を言えたりできるということでしょうか。

福田:逆に楽しめないものとはどんなものでしょうか。

宇津木:抽象的だったり、イメージしづらいものでしょうか。先日、『太陽へとぶ矢』と『聖なる大地をともに歩こう シアトルのこぼ』の、どちらにするか話し合ったときに、体で表現するテーマ活動にする

には『聖なる大地を～』に取りくむには時間が足りないのではないかということになり、『太陽へとぶ矢』になりました。『聖なる大地を～』がつまらないということではなく、物語に流れているテーマをとらえるのにある程度の時間を要したり、そこから表現を生みだすまでに少し苦しい道のりが必要という意味です。そういった一筋縄ではいかない物語に取りくむことも高学年の子たちにとっては大切なことだと思うのですが、そういったテーマを選ぶとき、子どもたちにもチューターにも覚悟がないと中途半端で終わってしまう気がします。

福田：演劇の脚本と違って、ラボ・ライブラリーは物語だから、台詞だけではなく語りもあり、そこも楽しめるポイントなのではないでしょうか。

宇津木：子どもたちはナレーションよりもみんな何かしら役をやりたい気持ちがあるようです。さらに『西遊記』は最後に歌があるので小さな子も楽しめます。また、マカロンと「ねえさん」(高1女子)が、強く推していました。だれかその物語を強く推している子がいると、取りくみ始めてからもその子たちがひっぱってくれることが多いようです。

福田：登場人物のなかに感情移入できるような要素があるとより楽しめるのかもしれないね。

吉岡：『西遊記』にでてくる人物はキャラクターが印象的なものが多いですね。

私は小学校教師時代、学芸会や学習発表会では、子どもたちが「遊べる」脚本を選んできた。遊べるというのは、子どもたちがことばの交流をおもしろいと感じられるということで、それが脚本選択の基準のひとつだった。いくつかの脚本を子どもたちに提示し、選んでもらう。子ども自身が「自分で選んだ」と思えるようにしたかったのだ。

●役決め

テーマが決まれば次は役決めが待っている。

宇津木：私はいったん全員にやりたい役を聞きます。人数に対して役が少ないので、どうしようか悩みました。パーティを引き継ぐまでは10人くらいで取りくんでいたもので、一人一役があたり前でした。今回、一つの役を複数でやるのは、チューターとしても初めての体験でした。

福田：役に対して人数が多くなければ、一人一役は原則にしてもいいと思っています。

ところで銀角を複数で演じるときの工夫はなんでしょうか。

宇津木：銀角は3人。マカロンは通しで、他のふたりが前半後半に分かれて担当しました。ふたりのイメージをひとつにすることを大切にしました。前半は銀角が術をかけるシーンが多かったのですが、ふたりでよく相談している姿がありました。後半は心理戦が多かったので、ことばにこめる気持ち、感情の裏付けについて、ふたりによく考えてもらいました。

●登場人物について考える

次に、「事前経過レポート」(※1)では、「導入期の取りくみ」のなかで、「登場人物について考える」に触れられていたことに興味をもった。

宇津木：どんなお話でもそうですが、必ず自分の役がどんな見た目、どんな性格、何が好き、何歳くらいか…ということを考えます。小学生は絵を描くこともあります。今回は、みんななかなか妖怪になりきれないようすがあったので、絵本を見つけて子どもたちと共有しました。その絵本や子どもたちが持ち寄った調べものから金角銀角は実は子どもの狐狸精だったことがわかりました。

ここで実際に使用された絵本『絵本西遊記』(太田大八／童心社)や子どもたちの描いた絵を見せていただいた。

宇津木:それがわかったときには、金角や銀角は恐ろしい怪物でも悪霊でもなく、少しおちゃめな雰囲気も盛り込めたらいいね、兄弟が死んで泣くのも、子狐だったら自然だね、などと話し合いました。名もない妖怪も、それぞれどんな妖怪なのかイメージしてもらいました。

福田:宇津木さんは演劇の経験はありますか。

宇津木:大学のサークルでミュージカルをやっていました。

宇津木さんの「登場人物について考える」の視点は、彼女の演劇体験に裏打ちされていることを知って大いに合点した。子どもたちのリアルで自然な演技にそれが反映されていたのだった。役づくりに即して言えば、手下役といっても、一般的な手下ではなく、それぞれにかけがえのない個性をもった手下で、各人が主役という意識をもってもらいたいと思っている。個の総合体としての手下たちであってほしい。



<銀角の魔法の縄で捕らえられた悟空>



<毛を抜いて半分とけた自分をつくった悟空>

●役を複数で演じるうえでの工夫

やむを得ず役を複数で演じることになったときの配慮や工夫はどうあるべきなのだろうか。例えば銀角がふたりいて、一斉に発声するとき特に工夫したことはあるのだろうか。

宇津木:一人の方が気持ちをこめやすいのは事実ですが、子どもたちからダブルキャスト自体嫌だ、とは言われませんでした。でも、活動も後半に入った頃、悟空をやった子の一人は耳からライブラリー通りに覚えるけれど、もう一人はそうではなくつかえてしまうことが多いので、きちんと覚えてきた子から「やりにくい」と相談を受けたことがありました。

福田:ふたり一役の場合、キャラクターはすり合わせるけど、それぞれの言い方があって良いと思います。ふたりの発声の総体はその役になるのだと思います。小中学校でよく取りくむ群読もみんなで声を出すけれど、みんなに合わせるのではなく、それぞれがしっかり声を出すことを大切にしています。ふたり一役をやるときもそのような工夫が必要かなと思うのですがどうでしょうか。

宇津木:同じ役の相手を意識しないで、自分の気持ちで言ったものが、うまく合ってくれればいちばんいいと思います。大切なのは、ただ台詞を言えていればいいのではなく、気持ちがこもっていることだと思います。

役を複数で演じるうえで考えたいことは、宇津木さんの指摘にあるように、それぞれが誰にどういう思いを伝えるのかが明確になっていることだと思う。単に他者に合わせるのではなく、それぞれの自律的な表現の総体が役の台詞に収斂していくのだろうと思う。

●「導入期の取りくみ」の活動

「事前経過レポート」(※1)の「導入期の取りくみと子どもたちのようす」が興味深かった。そこには中国の文化調べや「登場人物について考える」、中国のお月見(中秋節)などの項目が列挙されている。

福田:中国の文化調べとはどのような活動でしょうか。

宇津木:みんながそれぞれ中国について調べてきました。

福田:テーマ活動するときにはそのような下調べはするのですか。

宇津木:あまり勉強風にならないようにやっています。

福田:そのねらいはなんでしょう。

宇津木:例えば、ディズニーランドに入った途端に別世界に誘われるように、みんなにお話の世界に入ってもらいたいのです。他のお話でも、そのお話の国について調べたり、その国の行事(クリスマスなど)を楽しんだりすることもあります。お話の世界に入るために、その国や文化を身近に感じてもらえるといいなと思っています。

中秋節を楽しむ会では、『西遊記』にまつわるオリジナルゲームをしたり、小さい提灯に筆ペンで絵や文字を書いて楽しんだりしたようだ。これらの体験は物語を体感する重要なステップになっているようだ。



<「中秋節を楽しむ会」で>

●ナレーションを巡って

実際の上演について検討する前に、しっかり観客に届いてきたナレーションについて伺ってみた。

ナレーションは交代しながら一人ずつで担当していたのだが、特段の指導はしていないとのことだった。

かつて私は小学校のクラスで頻繁に朗読劇を演っていた。子どもの数が多いので、演者の後ろに並んで順番にナレーションを言っていく方式だ。台詞でもそうだが、今のナレーションを、誰に向かって言うのか意識しよう、と話している。もしも保護者が見に来ているなら、お母さんお父さんたち全員に、このお話を届けようという気持ちをもとうと話す。さらに、これは朗読劇の演出家に教えてもらったことだが、ナレーションは聞いている人だけでなく、演じている仲間をも気にかけて、いっしょに劇を進行する意識を持たなければならない。

ところで、話題は実際の場面でナレーションがしばし続かなくなったことに移っていった。なにか事情があったのだろうか。

宇津木: 移籍したばかりの中学生だったのでその子の力量がわからず、途中までは手取り足取り関わりました。順調そうにみえたので、あとは本人に任せました。表現を考えたりするのは好きだが、台詞やナレーションを覚えることは後回しにしてしまいがちでした。「たとえ日本語だけになってしまっても自分の力で物語をつなげてみよう、当日は助けられないからあなたを信じて任せる」と話しました。

福田: 私は、そのような状況であってもみんな慌てることなく、平然としていることが素晴らしいと思います。教育は「待つ」ことが大切で、困難を乗り越えた子は、次に大きく伸びると思います。子どもたちの成長を遠くから見守っていていいな、と思っています。

宇津木: 商業演劇ではないし、まだ成長過程の子どもなので、当然間違えてもいいと思っています。

福田: 演出家の竹内敏晴さんは、「上演劇は子どもたちがぬきさしならない場面に置かれることに意味がある」とおっしゃっていました。日常ではなかなかそういう経験ができない、フィクションだからいい、そんな竹内さんのことばを思い出しました。

宇津木: 思春期の子どもに酷過ぎるのではという意見もありました。

福田: 子ども同士助け船を出すこともあります。けっして失敗ではないということ子どもたちに伝えたいですね。

宇津木: 直前には緊張感をもってほしいから、私はサッカーの監督のように発表中は何も手助けはできないから、みんなだけでやりきるんだよ、と話しています。テーマ活動はスタートから発表まで子どもたちのものであってほしいんです。

台詞を忘れたときにどう対応したらいいのか、子どもたちと確認しておくことは必要だと思う。プロンプターを用意するのか、出演者同士で機転を利かせるのか、演劇はまさに「総力戦」である。

●特に印象に残った場面

発表会参観のあと上演DVDを送っていただいて丁寧に見直し、興味深い子どもたちの表現の有り様について話を伺い、検討することにした。話題はさまざまに広がっていった。

【物語の解釈とすり合わせ】

ライブラリーを聴いたり物語を読んだりしたときにさまざまな疑問が生じることがあるだろう。例えば「悟空は、老人が妖怪だとわかっていたが、背中に背負うと、一行よりわざと遅れて歩いた。みんなが山陰に見えなくなったら、この妖怪を地面にたたきつけてやろうと思っていた。」とある。その時の悟空のねらいは何か、メンバーで共通理解が必要だと思うが、どのようにすり合わせているのだろうか。

宇津木: 悟空が瓢箪のなかからハエになって脱出する場面。大きな子はテーマ活動に慣れていて、今までの経験に沿った表現で難なく進んでしまう傾向があるが、ストロベリー(小5女子)はいろんなことに気づくタイプ。ストロベリーの疑問や物語から感じたことを大きい子に伝えることで、物語世界が見ている人により伝わるような表現に変化していきました。

発表をふり返っての宇津木レポート(発表会後に地区の研修でシェアしたりレポート)にも「ラボっ子の発言、行動、ようす」として、次のように列挙されている。

- ・「なんで金角銀角はすぐに三蔵法師を食べないんだろう。さっさと食べちゃえばいいのに」(小5女子)
- ・「なんで悟空はわざわざ偽物のひょうたんを作って銀角に持たせたのかな。」(小5女子)
- ・「半分溶けた分身を作ったら、すぐに身をかくさないと金角に計画がばれちゃうよ」「隠れるところがないならすぐ小さい虫になっちゃえば」(小5女子)

このような子どもたちの素直な疑問を大事にすることは重要なことだと思う。みんなで一つひとつ丁寧に話し合うことによって登場人物の心の揺れや思い、場面状況などが見えてくる。発言した子が、発言を受けとめてくれたことで、もっと読んだり聞いたりする意欲にも繋がるだろう。

【場面を遊ぶ】

子どもたちの動きがとりわけ生きいきとしてきたのは、銀角が山で悟空を押しえ込むところだろうか。

宇津木：それぞれ雰囲気の違いがある山であるはずだから、みんなでイメージをふくらませました。動きを考えると、ストロベリーがかなりキーパーソンになり、みんなの表現の発想のもとになりました。山については、それぞれ違やかたちだから、須弥山は、切り立った山にしよう、峨眉山はゴツゴツした岩山のイメージで表現しよう、泰山は覆いかぶさるようなかたちにしようと、それぞれ個性をだして表現しようということになったのです。

福田：一番おもしろかったのは孫悟空と銀角の戦いあたりからです。ナレーターと金角が秀逸で、つまり語りと演技が一体となって伝わってくるものがありました。酒盛りの場面は子どもたちが遊んでいるなあと思いました。

【演出】

演劇だと演出者がいるが、宇津木パーティではどうしているのだろう。指導者が全面に立たないやり方が多いようだが。

宇津木：リーダーシップは子どもたちにとってもらいます。チューターは言いたいことがあるが、なるべく言わないようにしています。今回は三蔵法師をやった「ちーぼ」(大3女子)とマカロンが中心で進めてくれました。同じく大3の「まんぼう」「キャロット」が要所所でみんなをまとめたり、助け舟を出してくれたりしました。見ていて気持ちが伝わってこなかったりわかりにくかったり、場面と場面がつながっていないと感じるところは、「～しなさい」とは言わないように、「この表現はこういうこと？」と確認したり、「ここはこうなんじゃないの？」などと、考える余白をもたせたり遠回りに言うようにしています。

【具体物の使用】

銀角が魔法の縄を投げつける場面がとてもリアルだったが、どのような工夫がなされていたのだろうか。

宇津木：きっと魔法の縄だから、蛇のように意思があるんじゃないの、と言うストロベリーの意見を大きな子たちにも伝え、「それいいね」となり、いろいろ表現を試してみました。

福田：それもいいと思いますが、例えば実際の縄とか具体物を持ってきて練習することはありませんか。例えば縄跳びの場面があったとすれば、最初に縄を使ってやるとか考えてもいいかもしれませんね。

宇津木：今回は新聞紙を使って如意棒を作りました。長い物を振り回すってこんな感じというのを体感してもらうために作ったのですが、ちょっと軽かったみたいです。ふだんはあまりやりませんが。また酒盛りの場面で、妖怪たちはどんなお酒を飲んでいたと思う？ と聞いたら、「イモリが入っているんじゃないか」とか、「人間の肉で作ったお酒…」などいろいろな発想がでておもしろかったです。中国のお酒の白酒(パイチュウ)というのをネットで買って、チラッと見せました。

【ある演技】

後半、金角が自分の感情を他者に速球で届けたことで、それに対応するためにほかの子が盛り上がるという構図ができていておもしろかった。演劇はときとして中途半端ではない、真剣な対立が必要なこ

とがある。それを彼(ニョロ)から感じた。穴の中に吸い込まれるところも一回転して舞台下に飛び降りた。あまりテーマ活動で観たことがなかったが斬新だった。

宇津木:自分がラボっ子のときは『わんぱく大将トム・ソーヤ』の教会のシーンなどで客席まで使うことを時々していましたが、今回はニョロの発案です。彼の、仲間と観客を巻き込みたいという気持ちとサービス精神を感じました。

福田:学校演劇でも客席やギャラリーを利用して演じるけど、額縁舞台から飛び出して、見ている人もわくわくしますね。

【人物設定と状況設定】

物語の最終盤、戦い終わってみんなが旅を続ける場面では、いくつかみんなで確認することがあると思う。場や状況、行動など、どういう設定にしたのだろう。

宇津木:子どもたちの考えたものとしては、三蔵一行の旅が続いていく様を、客席に背をむけて、舞台の奥に進みだんだん見えなくなる表現をしたい。だから横から山がせまってきてだんだん見えなくなる表現になりました。

福田:なるほど、行動としてはそういう設定にしたんですね。さらに場の設定も大切に、例えば海辺を歩くときもそこが岩場なのか砂浜なのかで歩き方が変わってきます。加えて役での仲良しグループを作って歩いて行くということも考えてもいいですね。

宇津木:最後の最後まできちんと、例えば、一行のなかでもどんな会話があったのかななどと、投げかけてもよかったのかもしれないですね。

●英日の二言語で台詞やナレーションを語ること

テーマ活動の永遠の課題であるが、英日の二言語で台詞を発するのは不自然に感じることもあると思うが、どのように対処しているのだろう。

宇津木:どうしても日本語で理解する部分が多いですね。本当は英日で取りくんだあとで、英語だけで表現したときに英語に気持ちをこめて表現するところまでやれると完成なんだと思いますが、なかなかそこまで取りくめたことはないですね。

今回の『西遊記』を見ていて、あまり不自然さを感じなかったが、子どもたちの表現がもっと豊かに活性化するためにどんなことができるか、と考えてみた。例えば、最後の戦いの場面を日本語だけ、または英語だけでやってみるという段階があると、少し表現が変わってくるのかなと思う。日本語で丁々発止する感覚を体に染み込ませながら、最終的に英日でやると、変わってくるものがあるかも知れない。

宇津木:一言返事するだけの台詞だったら、英語だけにするとか、それもありかな、と思います。『ピーター・パン～海賊船上の決闘』で海賊が海に落とされるところの叫び声を2回言わなければならないのです。

福田:現場で実践しているチューター同志で、ぜひ共同研究していただきたい課題ですね。

今回の発表では、子どもたちの台詞はかなり届いていると感じたが、もう少しできるかなと思ったのは「聴く」側のこと。自分の役として聴くことを、もっと意識できるといいと思う。例えば、それぞれ名前や個性のあろう手下が銀角に声をかけられたときに、それぞれはどんな気持ちで、どんなふうに聴いているのか。自分のキャラクターでそれぞれちゃんと反応することで、場が変わってくると思う。今の子どもは喋ることは得意だが、実は、聴くことが苦手なのかもしれない。

宇津木:「聴く」ということを意識している子としていない子がいると思います。金角と一緒に泣いている手下もいました。それぞれが気づいてやっている子と、いま台詞がないから、という姿勢の子もいます。

「いま台詞がないから」という子にどのような声をかけられるか。学校教育現場では画一的でない反応の仕方でも教えていた。どうかすると「ことばと心の受け渡し」の「渡す」を教えることに熱心で、「受ける」についてはほとんど指導できてない教師が多い。

今まで多くのテーマ活動を見てきたが、「聴く」「反応する」ということがグループ全体でできたときに、表現の質が変わってくるように思うのだ。

●テーマ活動特有の「からだの語り」とライブラリーの音楽

他の演劇ではほとんど見られない、テーマ活動特有の身体表現のことを「身体の語り」としたのは吉岡さんだが、これを竹内敏晴流なら「からだの語り」となるだろう。

いずれにして、ナレーターや登場人物などの「ことばの語り」に対して、あるときは山や川になったり、あるときは登場人物の心情を表現したり、集団での表現「からだの語り」は奥深い。

さて、『西遊記』で「からだの語り」で意識したことはあったのだろうか。

宇津木:必ず、その場面をつくっているみんなが同じものが見えているようにしようということを意識しています。例えば蓮華洞(蓮の花の形をしている洞窟)を表現するときに、何をいちばんメインで表したらこのシーンの楽しさやおもしろさを伝えられるかを考えます。高い山があって、そこにドローンでズームしていくと、そこに蓮華のかたちをした美しい蓮華洞があるという表現になりました。

福田:蓮の花の表現は見事でしたが、だれが考えだしたのですか。

宇津木:「エーフィー」(中1女子)という子です。最初絵を描くところから始まり、中国の建築も調べ、柱を作ったりしたけど柱じゃつまらないということで試行錯誤しました。

「からだの語り」だけではないようだが、様々な表現は基本的に子どもたちが発案して、話し合いで決まっていくようだ。こうしたことが可能になる異年齢集団の良さが生きている。



<物語冒頭の「蓮華洞」>

他には代えがたいラボ・ライブラリーの表現の武器は挿入された音楽である。これをどう有効に活用していくのかが問われている。

宇津木:ライブラリーには場面に合った音楽が入っています。ことばもそうですが、音楽も聞いてもらいたいと思っています。そこからインスピレーションを感じるのです。英語は英語の役者さんが演じているので、それをまずなぞってみることで、悲しいならどんなふうに悲しいかも感じ取れるのです。

吉岡:『ハムレット』を縮約・演出してくださった河合祥一郎氏は、最初にラボ・ライブラリーの企画を聞いた時、『ハムレット』をたった45分に編集することは絶対無理だとおっしゃっていました。けれどもラボ・ライブラリーでは、シーンや登場人物の心情に即した音楽が相乗効果となって、シェイクスピアの長いセリフを凝縮できるのだと、実際に制作が進行するにつれて実感されたとのこと。河合氏はシェイクスピア劇の上演をするにあたっての縮約について相談を受けることもあるが、音楽をうまく使うといい、とアドバイスするようになったとのこと。

途切れることなく語っていただいたインタビューの最後に、言い残したことがないか伺ったところ、ラボの存続理由に話は及んでいった。

宇津木:コロナ禍になったために、ラボの存在価値を考えました。世間的には英語教室という立場ですが演劇的なアプローチをしていくなかで、心を育てる場がラボだと思います。学校では早いうちからどんな職業をしたいか、そのために今あなたはどんな準備をするかと迫られます。どういう職業人になるかを前倒しで考える風潮があることに疑問をもっています。もっとじっくり考える時間をもつのが10代ではないかと思うのです。ラボは、何も無いところからつくりあげます。多感な時期にそれぞれが心と体をフル回転させて、仲間とともに無からひとつの作品を生み出すことの価値を、このような風潮だからこそ、あらためて大切に守っていかなければならないような気がしています。

最後に、『西遊記』というテーマ活動を通して個人やグループやパーティとして成長したことは何か、綴っていただいた。

●テーマ活動を通して成長したこと(宇津木)

長川パーティの引継ぎから約半年後に取り組み始めた『西遊記』でしたが、テーマ活動をするうえでグループ性の重要さを強く感じました。というのも、ラボは演出家のいる劇団ではないからです。劇団であれば、役のイメージに合った俳優を集め、演出家がまとめます。でも、テーマ活動は子どもたちのものであり、チューターは演出家ではありません。今回の『西遊記』では、物語世界に子どもたちを誘うことに加え、いかに子どもたちが発言しやすい場にするか、未熟なアイデアであっても遠慮なく提案でき、それを別の子に委ねる信頼感を子どもたちの間にどう育むか、よりよい活動(作品)にしていくために何かを乗り越えなくてはならないときに誰がどのように声をかけていくのが良いのかなど、チューターとしては頭の痛い日々でもありましたが、その分得るものもきつとたくさんあったと信じています。

テーマ活動の楽しさや醍醐味は、ラボ・ライブラリーを元にして無から無限大の表現が生まれることだと思います。仲間と生み出す楽しさ、苦しさ、達成感、後悔も含め、子どもたちに体験してほしい。そのためにできることは何か、あらためて考えていきたいと思いました。

パーティとしての成長のなかでいちばん目覚ましいものは、まさにグループとしてのまとまりです。発表後、年が明けた1月のパーティでのいちばんの変化は子どもたちの距離感で、ひとつの山をともに越えたというような親密感と安堵感がありました。清瀬グループではあおりんご、ストロベリーを中心にライブラリー双六作りとナーサリーライムの暗唱に取りくんだのですが、双六のアイデアを金曜日グループの

中高大生にも聞いてみたり、ナーサリーライムの暗唱に合わせたゲームを考えて、3/21のパーティ内交流発表会でみんなを巻き込んでゲームを楽しむ一幕がありました。『西遊記』の発表前、あおりんごとストロベリーはまだまだ金曜日の移籍メンバーと打ち解けられないようすがあったのですが、幼児グループ～中高大生までをゲームで見事につないでみせました。これはふたりの自発的な行動で、私もとても驚きました。この時に中高大生たちがふたりの意志をしっかり受け止め、温かくサポートしてくれたこともとても大切な行動だったと思います。

金曜日グループは1月から3月まで『太陽へとぶ矢』を英語のみで取りくみ、ネイティブアメリカンの文化、歴史、思想などに触れ、調べものを持ち寄り、テーマ活動に取りくむなかでの会話や笑顔がより自然体になり、お互いの心の距離がぐっと縮んだように感じました。どんなに演技が上手でも、どんなに台詞を覚えるのが早くても、仲間の存在を大切にできる、認め合える、信頼し合える心がなければ、演出家のいないテーマ活動は成立しないのではないのでしょうか。



<『西遊記』の発表がグループとしての大きな成長に>

■インタビューから視えたもの

●インタビューを受けて(宇津木)

私なんかで良いのだろうか、少し緊張して臨んだインタビューでしたが、福田先生、吉岡さんとお話をさせていただくなかで、今回の『西遊記』のみならず、チューターとして10年間もがいてきた答え合わせのない試行錯誤に光を当てていただいたような、自信をもっているんだと少しだけ思えたことは、本当にありがたいことだと感じています。

インタビューのなかで特に印象に残っているのは、ナレーションの役割の大きさと、ことばと心の「受け手」についてです。台詞のある役の子だけではなく、ナレーション、台詞を聴き反応する受け手、そこに加えて背景などの身体表現をしている子、すべての子が物語の担い手であり、担い手みんなが台詞の有る無しに関わらず物語を感じ、物語の住人として動けたときに、伝わるテーマ活動になるのかな、と思いました。テーマ活動も含め劇には様々な要素が必要であることもあらためて考えさせられました。物語に流れているテーマの理解、背景や物を表現するにはその物自体をよく知らなければできないし、役をす

るにもその役にどこまで心を寄せられるか、自分の役も相手の役に対してもどこまで想像力をふくらませ理解を図ることができるか、またそれをどう伝えるか…。テーマ活動を通じて子どもたちが挑んでいることは驚くほど多岐にわたります。これに真剣に取り組んだときに手にする力は本当に大きいと思います。お勉強と思わずに気がついたら夢中になって取り組んでいた、となるように、子どもたちの心に火をつけるのが私の仕事なのかもしれません。

●インタビューに立ち合って(吉岡)

私はインタビューに立ち合い、次のふたつのことを実感しました。ひとつは、ある視点をもって「聞く」ことで、チューターの実践や子どもたちの成長のようすが明らかになるということです。私は仕事柄、チューターにレポートを書きいただくときなど、さまざまな質問をすることがありますが、今回は福田先生の視点で質問していただくことにより、ついチューターや事務局ではあたりまえの「前提」としてしまっていることについても、チューターの実践や考えを引き出していただきました。そのため、テーマ活動の取りくみ始めから発表までのプロセスが、点ではなく面でみることができましたと感じています。

そしてもうひとつは、それによって、今回宇津木チューターの実践と、その背後にあるチューターの思いや願い、考えを知ることができ、ますますテーマ活動のおもしろさと、それが子どもたちが育つ可能性を無限に秘めた場であることを感じました。テーマ活動のプロセスは、多様で複雑で、いろいろなことが往還しています。ふたつのことばで語られた物語と音楽で構成されたライブラリーがあり、子どもたちがいる。そしてチューターがかかわることさまざまな化学反応が起こり、子どもたちが成長していく。そのことが、宇津木チューターの実践を、福田先生が引き出し言語化してくださったことで具体的に知ることができました。貴重な経験ができたことを感謝しています。

■終わりのことば(福田)

宇津木インタビューが実現したのは、まだコロナの終息にはほど遠い2023年2月の半ばのことだった。宇津木さんとの対面は初めてとは思えないくらい、次から次へと話題は途切れることがなかった。話し合いは、私の問題意識にそって、テーマ活動づくりの実際、具体的に肉薄できたという印象がある。吉岡さんの参加も得て、共感・共鳴できる内容が多く、充実感で満たされた。

今回の報告の総括は、おふたりの「インタビューを受けて(宇津木)」「インタビューに立ち合って(吉岡)」で尽きているように思う。まずここから読み始めればこの報告は理解しやすくなると思う。

さて今回の宇津木チューターのテーマ活動づくりの根っこには、学生時代のミュージカル体験が色濃く投影されていることを感じる。一人一役の原則、登場人物について考えること、場の設定の確認などおおいに合点がいった。

今回の鼎談を通して、私のなかで確認できたことは次のことであった。

〈テーマ活動は物語の制約のなかで、登場人物が自由に発想を膨らませ、他者との交流をおもしろがり始めたときに等身大の演技が現れてくる〉

注)※1「事前経過レポート」:発表会にむけて取りくむパーティのようすを地区研でシェアしたレポート

◆参考①

2022年 ラボ西武地区・冬のテーマ活動発表会の感想

2022年12月18日, 東村山市中央公民館ホール

福田三津夫

コロナ禍ということもあって、久しぶりのテーマ活動発表会参観になりました。けして状況が好転したとは言えないなか、勇気と覚悟を持って踏み出しているラボ・パーティと地区研究会の皆様に敬意を表します。

所用のため第2部までを拝見したのですが、その中で感じたことを書かせてもらいます。

6パーティを通して再確認したのは、発表の場を持つことの素晴らしさでした。生の子どもたちの躍動は見る者に歓びと感動を与えてくれます。かつて、演出家の故・竹内敏晴さんは、生の舞台の良さは、出演者が抜き差しならない場に立たされることだとインタビューに答えてくれました。

今回の舞台で、時として台詞に詰まってしまう場面が見受けられました。そんな時、けして慌てることなく対応しようとする仲間やチューター、それを温かく見守る観客の存在がありました。小さい子にとって理解が容易ではないと思われる物語も、年長者の自然な導きで違和感なく進行していきました。ちょっとした困難を乗り越えたとき、子どもたちは加速度的に成長していきます。小学校で長年子どもたちを見守ってきた私はそう思うのです。

ラボのテーマ活動で素晴らしいと思うのは、集団で山や川などの自然や人工物を作ったり、物語の底流に流れる空気を群舞で表現したりすることです。これらの段取りを考え、身体表現するのにどれほどの工夫と時間が費やされたことでしょうか。テーマ活動を見る大きな楽しみのひとつはこの点です。今回もそれぞれのパーティごとに独自の取り組みと工夫が感じられ「満腹感」を味わうことができました。

さて、ラボ・ライブラリーを読んでない私にとって若干物語が伝わりにくい面も散見されました。フィクションの世界がリアルに目の前で展開されているように見えるには何が必要かということを考えました。私がか切にしているのは次のことです。

■「ことばと心の受け渡し」が成立しているということ

- ・役を演じているときは、「誰に」「何を」伝えるのか明確にしておく必要があります。「何を」は「どんな気持ちで」ということが大事になります。(渡す＝語る, 話す, 届ける)
- ・さらに、一方的に〈渡す〉だけでなく〈聴く＝全身で受け止める〉ことがその前提になります。
- ・演じている子だけでなく、ナレーター、複数キャスト、マイクの使い方など「ことばと心の受け渡し」の観点で考えてみる必要があります。

今回の発表会で嬉しい再会がありました。私が初めてラボ・パーティに出会ったのは2007年のことでした。岩坂えり子パーティです。矢部顕さんに導かれて3回訪問しました。この顛末については拙著『実践的演劇教育論－ことばと心の受け渡し』(晩成書房, 2013年)に書いています。今回岩坂パーティの「きてれつ六勇士」には感動しました。生の舞台は初見でした。

もうひとつの再会は竹内雅子パーティでした。2014年、私は吉岡美詠子さんの案内で宇野由紀子パーティに数回お邪魔しています。その様子は拙著『地域演劇教育論－ラボ教育センターのテーマ活動』(晩成書房, 2018年)に収録させてもらいましたが、表紙の写真も宇野パーティのものでした。惜しまれて宇野さんは亡くなりましたが、まさか竹内パーティに引き継がれたとは知りませんでした。『ペルセ

ウス』に当時子どもたちが出演していて目頭が熱くなりました。成長した彼らを隣の座席で教えて下さったのはお連れ合いの宇野誠治さんでした。

司会進行, 国際交流の体験発表, テューターのまとめのことば, 帆保美穂子さんの丁寧な私の紹介など, さすがラボ, 非の打ち所がありませんでした。

◆参考②

テーマ活動づくりの方法論を求めて

—インタビューで話し合いたいこと—

I, テーマ活動との出会いは1998年, リーデフ98(フレネ教育者国際会議)

II, テーマ活動の特徴①〔前提〕

*ラボ・ライブラリーは物語であり脚本ではない。

- ・物語「時, 場所, 人物, 事件などの描写」
- ・脚本「ト書き, 台詞」

→国語教育の読解指導では, 物語文(物語, 詩, 脚本など)と説明文(説明文, 観察文など)を扱う。

*テーマ活動は脚本を演じるのではなくて物語そのものを演じる。

- ・物語「時, 場所, 人物, 事件などの描写」を丸ごと演じる。
- ・台詞と地の文(語り)
- ・語り…ことばの語り(ナレーション)・からだの語り(集団身体表現)

→物語文の読解指導の過程の中で朗読劇的展開(台詞と地の文)をする場合がある。

III, テーマ活動の特徴②〔演技〕

- ・二言語の劇, ダブルアクションにしない工夫, 見る者にとっての利点を確認
- ・集団身体表現(背景, 人物の気持ち, 場の空気…)

→参考: 劇団風の子などでの関矢幸雄の素劇, クラウン・道化など

IV, テーマ活動の特徴③〔主体〕

*いきいきしたテーマ活動を創り出す!

- ・子どもが自ら創り出す自主的自律的活動
- ・豊かな文化を継承する縦長の異年齢集団
- ・テューターの役割

V, テーマ活動づくりの方法論をもつ。

- ・「私のテーマ活動づくり〇か条」を持つ。
- ・例, テーマ活動づくりの視点①～⑥

- ①テーマ(演目)決めのポイント(話し合いの時間, 注意していることなど)
- ②役決め(立候補, オーディションなどの方法)
- ③劇づくりの実際(集団討議, 集団指導体制, テューターの役割)
- ④劇づくりの方法(台詞=ことばと心の受け渡し, ナレーション=ことばの語り)
- ⑤集団身体表現の作り方(からだの語り)
- ⑥個を大切にすテーマ活動

VI, 演劇教育としてのテーマ活動

*テーマ活動は演劇である。

- ・演劇とは演じる者と見る者が創り出す身体表現芸術(総合芸術?)
- ・「何もない空間」ピーター・ブルック
- ・「持たざる演劇」イェジュイ・グロトフスキー
- ・良い意味で見せる劇の追求が必要。

*テーマ活動は限界芸術である。(鶴見俊輔)

- ・純粹芸術・限界芸術・大衆芸術
- ・学校劇は限界芸術。「学芸会的演技」などと揶揄されることがあるが、本来はそのものに価値があるということ。等身大の演劇。(例, 高校演劇)

*「ことばと心の受け渡し」の充満(どう受けて, 誰に, どんな気持ちを届けるのか)

VII, 参考

*拙著『実践的演劇教育論－ことばと心の受け渡し』晩成書房 2013年

*拙著『地域演劇教育論－ラボ教育センターのテーマ活動』晩成書房 2018年